

介護職のための誤薬を防ぐポイント&マンガでわかる危険な副作用

介護専門職の総合情報誌

おはよう21



June
2018

特集

こうすればうまくいく
誤薬の防止と
危険な副作用の
見分け方

特別解説

2018年度 介護報酬改定のポイントQ&A

おはようクローズアップ

認知症のBPSDを数値化

ケアの方向性を見出す評価プログラム

鎌田實の△な介護のすすめ

AYAさん(クロスフィットトレーナー)



中央法規



O H A Y O

Close Up

認知症のBPSDを数値化 ケアの方向性を見出す 評価プログラム

デイサービスすずらん梅丘(東京都世田谷区)

認知症の人の行動・心理症状（BPSD）の理由を理解し、適切に対応するためのBPSDケアプログラムが、東京都医学総合研究所によって開発されました。その概要とともに、プログラムを現場で取り入れている「デイサービスすずらん梅丘」（東京都世田谷区）の実践をレポートします。

BPSDの背景を探る

介護の現場では、BPSDへの対応に苦慮することが少なくありません。また、在宅に目を向けても、認知症の人にそうした行動が表出すると、家族介護者の心身には大きな負担がかかります。

こうした背景のもと、東京都医学総合研究所の西田淳志さんが中心となり、スウェーデンで実践されているBPSDケアプログラムをもとに、日本版の開発が進められてきました。

その考え方の基本となっているのは、BPSDは「意味あるメッセージ」であり、背景を探ることが大切であるということ。そこから、一人ひとりに合った適切な支援を見出すことで、BPSDの軽減を図ることが目指されています。

2017年度は、モデル事業として東京都内（足立区、世田谷区、武蔵野市）の複数の事業所で実際にプログラムが導入され、その効果も得られています。

その人に必要な支援のあり方が見える

オンラインシステムとして運用されるこのプログラムの利用は、パソコンやタブレット端末で行います。所定のIDでログインした後、BPSDの背景となる利用者の生活状況について、「妄想」「幻覚」「興奮」「うつ・不快」「不安」など12項目に分類された約90の質問に、「はい」「いいえ」の答えを入力します。

すべての回答が終わると、この12項目の重症度が点数として表示されます。点数の高い項目が、特に支援が必要な部分です。これを受けて現場では、職員同士で具体的な対応策を話し合い、ケア計画を立案・実行します。さらに、このプログラムを使って再び観察・評価することで、ケア計画の内容を検証。必要に応じて軌道修正します。いわばケアのPDCAサイクルを回すのです（図）。

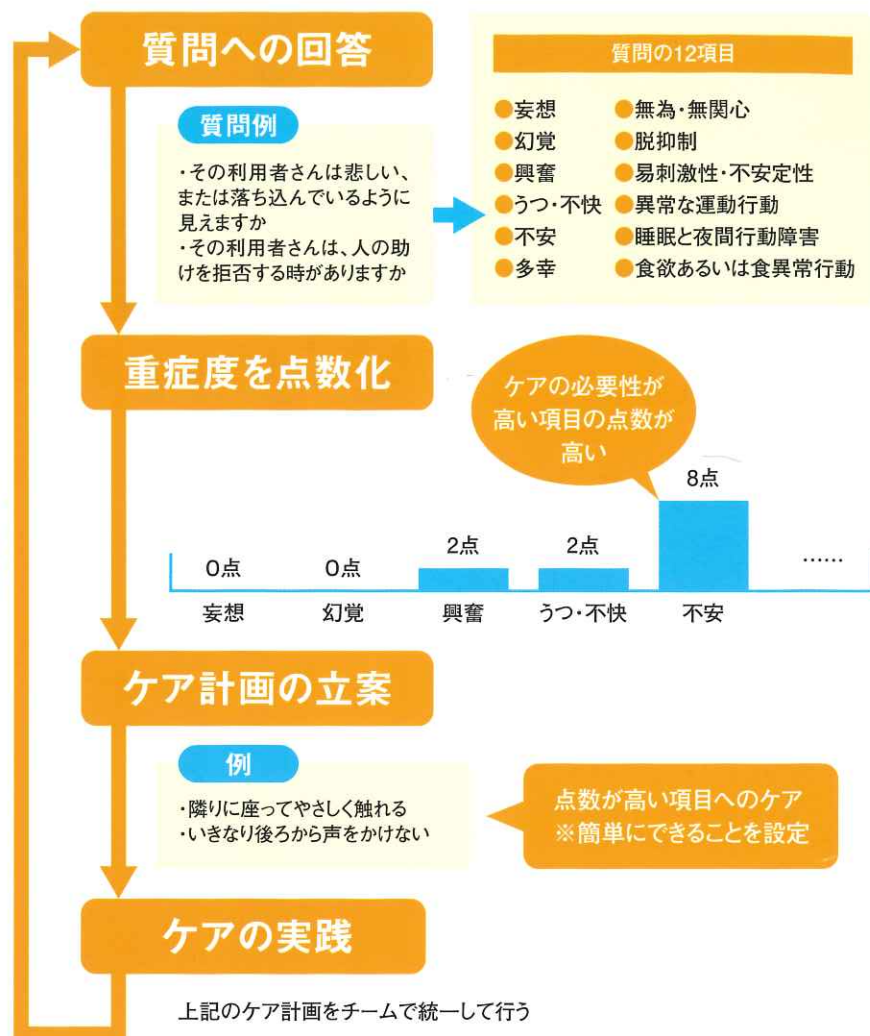
現場では効果を実感

2007年、認知症対応型デイサービスとしてオープンした「デイサービスすずらん梅丘」（以下、梅丘）は、1年ほど前からこのプログラムを導入しています。

以前から、認知症の人が安心できる環境づくりを心がけてきたという梅丘。「認知

図 BPSDケアプログラムの流れ

再評価



株式会社すずらん代表取締役の今井康明さん

症の人の言動の背景を探ることに努めていた」と語るのは、運営会社である株式会社すずらん代表取締役の今井康明さん。プログラム開発のワーキンググループに携わり、そのメリットを感じていたことから、現場で導入することを決めました。「認知症ケアを実践する介護職は、よいケアを行うために一生懸命工夫していると思います。しかし、この工夫が職員によってバラバラだと、利用者は混乱してしまいます。その意味からも、このプログラムを基盤にすれば、ケアの統一が図れ、効果もわかりやすくなると感じました」。

実施しているのは、支援に課題がある利用者にしぼっており、3名程度の職員が話し合いながら、質問内容に回答しています。しかし、慌ただしい現場で約90の質問に答えることは、職員にとって負担にならないのでしょうか。この点について今井さん

は、「たしかに、慣れるまでは戸惑うかもしれませんが。しかし、利用者によい変化が生まれることを考えると、取り組みメリットのほうが大きいと職員も感じています。」と言います。

その人の新たな一面が見えてくる

現場でこのプログラムを使用してきた管理者の佐藤勝宣さんは、プログラムの意味を次のように語ります。

「このプログラムは、単に利用者の状態を点数化することだけに焦点を当てているわけではありません。その過程も重要であり、プログラムというフィルターを通して、職員同士で話し合うことで、利用者の新たな一面が見えてきます」

プログラムの質問に答えるために行う職員同士の話し合いによって、「自分が知ら



を使って現場で話し合うことも